洋裁を修業し子供を育てる

中郡支部　高根　まさ子（妻）
戦没者　高根　金雄
戦没地　中国・河北省

本籍地が秋田なので、支那の部隊に入隊したままでした。一年半位して昭和十八年六月十五日夜、兵隊の主人が玄関から入ってきて、私が休んでいる床の中に入って来たのです。私は「まぁ嬉しいわ」と思ったものですが夢でした。それから、半月程してから戦死の公報が入りました。「魂は帰るものなんだなぁ」と、その時、夢のことを思いました。

そして、子供を養うためには、これから何をしたら良いかと、自分の進む道について考えました。そして、洋裁の道を選びました。

昭和二十一年の春のことです。服を縫う仕事に就くことが出来、四歳の子供を実家に預け、私もそこから毎日仕事場に通いました。先輩の傍らで、まとめと言う手縫い部分を手伝う様になり、一年位してようやく一人立ちとなり、本縫いをする様になり、ブラウス等の小物から始まり、徐々にスーツやコートを仕立てる様になってゆきました。

当時の有名女優の高峰三枝子さんのコートやスーツを仕立てさせていただきました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

「高根さんの縫った服は着易い」と高峰さんが言われたと、先生から誉められました。

忘れていましたが、私は「感じ物」が得意でした。後になりましたが、スーツ等に入れる肩台（パット）は綿を積んで作りますが、一般の縫子さんは綿の始末が乱暴で散らかしていましたので、私は暫らく休日を返上して出勤し、片付けを続けました。良いことばかりではなく失敗もありました。毛足の長いモッサと言う生地で外人のコートを仕立てた時のこと、お襟に毛皮のつくものです。仕上げの時に誤って毛皮が縮んでしまい「しまった」と思った時にはあとの祭りでした。それを剥がして直しの専門店さんにお願いして、元通りに直って来た時にはホッとしました。無事お客様には納品出来ました。

振り返ると、あれや、これやの出来事がありましたが、先生から認められて、助手にして頂きました。週二回東京のお店で仮縫いの手伝いをする様になりました。先生が右側半分の仮縫いを身体に合わせて針（ピン）を打つと、それを見て左側を同じ様に針を打つのが役割です。そうして先生の仕事を覚えて行くのです。次の日は、針を打直し、仮縫いを解いて、白チャコで訂正して、先生に見ていただき、先生が赤チャコで再訂正をなさいます。翌日は早出して、針跡の様に画いた白チャコと先生の直した赤チャコの箇所との違いを勉強するのです。この経験は貴重で良く勉強させてもらいました。

お仕事場には縫子さん七、八十名の人がおられました。私は十二年程勤めさせて頂き、独立させて貰いました。昭和三十三年から五十三年まで東京で働き、息子も大学を卒業することが出来ました。

その年、大磯の母の面倒を見させて頂くことになり、大磯に戻りました。母の愛を後で知りました。老人会の手伝いや遺族会のお世話にもなりました。

先日、テレビで「ゲゲゲの女房」の物語を見ておりました。現在があるのは、多くのお世話になった方々あってのことと感謝されておられる。と言う様な物語でした。私の思いも全く同じで、それは、それは多くの方々、両親家族をはじめ、先生、先輩や同僚そして縫子さん、友人、お客様、その他、まだまだ沢山の人達に助けられ、支えられての人生だったことを改めて思い起こし感謝で一杯になりました。一人では何事も出来ません。皆々様のお陰でございます。有難うございました。

記念誌の原稿依頼を受けて、お陰様で、いろんなことを思い出させていただきました。

最後に戦争のない世界平和の実現を、神かけてお祈り申し上げて終わります。

©2011_財団法人神奈川県遺族会